



悠久舞奉奏



秋季大祭齋行

一年に一度、二女神が御揃いになり、御神威新たに齋行される秋季大祭。昨年に続き仮本殿に特設舞台を設置して行う異例の形式ではあったが、概ね好天に恵まれ、平日にもかかわらず連日多くの参拝者で賑わい、夜間まで拍手の音が途切れることなく響いていた。

十月一日 みあれ祭(海上・陸上神幸)主基地方風俗舞奉奏

午前八時半、大島・中津宮にて出御祭を齋行。沖津宮と中津宮の御神璽を神輿に奉安し、大島小学校鼓笛隊の先導のもと大島港まで陸上神幸が行われ、沖・中両宮の神輿を御座船にお載せした。

午前九時二十分、大島港を出港。波切御幣・御長手(紅白の吹流し)・大漁旗で飾られた約九十隻の漁船が二隻の御座船に続いて、船団を成形、台風の余波でうねりが残り波立つ中、しぶきを上げながら



陸上神幸 (神湊) 神輿を担ぐ中学生等



平成ノ大造営

時満ちて
道ひらく

余滴

十月十七日、表千家家元による献茶祭が執り行われ、家元・千宗左宗匠(而妙齋)の手により濃茶と薄茶の二服が恭しく神前に捧げられた。この献茶祭は昭和三十七年より出光興産創業者出光佐三氏の御尽力により始まり、毎年出光家の奉納により齋行されている▼茶の道を志す方々にとつては御家元の御点前を間近で拝せる待望の神事でもあり、その淀みない清らかな御点前の一挙手を見逃すまいとする同門下多数の参列者は緊張感さえも伴う真剣な眼差しで拝し、境内には静寂の時が流れた▼茶道といえは仏教・禅宗との深い関わりが連想されるが、神道に通ずる面も多分に感じられる。それは茶・華・剣等二道とつく日本の伝統文化は日本人としての生き方、考え方にも通じ、日本人と神道の関係性ともいえる。▼神道も教えでなく「道」であり、時代の変遷と共に仏教等様々なものを受入れ融和しながら育まれた日本人そして神道の生き方・考え方の多様性そのものとして現代に伝わっている▼儀礼として大変に細やかな作法を淀みなく奉仕された御家元の姿は、茶を献ずるその真心までが伝わってくる。神道とは「誠の心」と説かれる事もある。我々がそれを表すとすれば奉仕する姿、祭典における作法の厳修ではない。今回の御家元のご奉仕を拝し、これからの奉仕に活をも頂いた。(長

神具・装束・授与品



装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る
フリーダイヤル 0120-075-980
福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401
フリーダイヤル 0120-055-092
授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23
フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技

総合建築業 株式会社 弘江組

〒811-3406 福岡県宗像市稲元4丁目20 電話(0940)32-2567



1 日祭・風俗舞奉奏

大船団が勇壮に神幸した。
海上神幸は一時間を掛け、神湊港沖に到着すると、各供奉船が停船した御座船を周回し、宗像七浦の各母港へと帰還した。

沖・中二隻の御座船は、辺津宮の御神璽が待機する神湊港へ入港、一年ぶりにお揃いになられた三女神を載せた三基の神輿は高台にある頓宮(御旅所)へと進み、頓

宮祭が斎行された。祭典後には各御座船奉仕者、また海洋神事奉賛会前会長の権田仁八郎氏に対し、それぞれ感謝状が贈呈された。

頓宮からは神湊市街地を陸上神幸、地元氏子住民や玄海中学校男子生徒が神輿を担ぎ、同女子生徒は巫女装束にて後従を奉仕し、同小学校の児童も稚児衣装にて紅白の吹流しを捧持するなどして古雅な姿の御神幸が再現された。

神湊郵便局前の御駐輦所で御神璽は御座車に移され、白バイに先導のもと辺津宮へと御神幸。多くの参拝者に迎えられる仮本殿へと入御し、秋季大祭一日祭を斎行。高向宮司が祝詞を奏上し、主基地方風俗舞が厳かに奉奏され、恙無く祭典は終了した。

**十月二日「一日祭」
流鏝馬神事、翁舞奉奏**

二日は曇天の中、午前八時から神門前の馬場道で流鏝

馬神事の奉納があり、馬上の射手が地上七メートルの的に向け、次々と矢を射ると参拝者から拍手が起こっていた。

午前十一時からの例大祭では福岡県神社庁宗像支部の神職奉幣使、宮地嶽神社の神職奉幣使、氏子奉幣使にもご参向いただき斎行。喜多流・梅津忠弘師同門下の奉仕により「翁舞」も奉奏された。

**十月三日「三日祭」
浦安舞奉奏**

午前十一時より三日祭を斎行。地元玄海中学校の女子生徒四名による浦安舞が奉納され、十二単を身に纏った舞姫の姿は多くの参拝者を魅了した。祭典終了後、奉仕神職は高宮、第二宮・第三宮、宗像護国神社の各祭場に別れ、秋祭りを斎行した。

午後二時からは南坊流・二代洗心庵・瀧口宗芳氏以下同社中による献茶祭が斎行され、見事な御点前が披露された。

主なる奉仕者御芳名 (敬称略・祭典の順)

- ◎宗像大社氏子会
- ◎海上神幸奉仕
海洋神事奉賛会(会長・中村忠彦)
- ◎沖津宮御座船第二十三艇子丸
(鐘崎) 船長 権田 電也
- ◎中津宮御座船 福吉丸
(大島) 船長 福崎 真二
- ◎沖津宮先導船 第二健栄丸
(神湊) 船長 三苫 英了
- ◎中津宮先導船 幸福丸
(福岡) 船長 広渡 和幸
- ◎花火船 生漁丸
(大島) 船長 上野 美美
- ◎報道船 みたけ
(大島) 船長 遠藤 英樹
- ◎陸上神幸奉仕
- ◎御座車
西久大運輸倉庫(株)
(株)新出光
宗像地区タクシー協会
宗像観光協会
- ◎先導車
宗像観光協会
宗像地区交通安全協会
宗像市消防団第十一分団
- ◎供奉車
宗像市消防団第十二分団
玄海ホテル旅館組合
大島鼓笛隊奉仕
大島小学校児童
- ◎御長手棒持・提灯行列
玄海小・中学校生
- ◎陸上神幸実行委員会
玄海地区コミュニティ運営協議会
津加計志神社総代、宗像・沖ノ島世界遺産市民の会、玄海地区交通安全協会、神湊盆踊り保存会、宗像市消防団、宗像市、宗像大社氏子青年会
- ◎主基地方風俗舞奉仕
(舞方) 清水 陽介、松井徳一郎
(歌方) 石津 典秀、菊本 兼二
永島 卓爾、中野 久志
- ◎流鏝馬神事奉仕
世話役 宮木 貞彦
奉仕者 眞武 孝行、河野 暁
高瀬 秀平
- ◎氏子奉幣使
城野 正雄(福津市)
- ◎翁舞奉仕
喜多流 梅津忠弘師以下同門下中
- ◎浦安舞奉仕
岩佐 静音、中野 日夢
白石 愛美、中野友梨奈
- ◎献茶祭奉仕
南坊流・二代洗心庵・
瀧口宗芳 同社中
- ◎高宮神祭備祭奉仕
宗像大社氏子青年会



流鏝馬神事



氏子奉幣使 城野正雄氏

「高宮神奈備祭」

当大社職員により悠久舞奉奏

午後六時、秋季大祭の無事齋行を感謝し、更なる神威の無窮を祈念する高宮神奈備祭を高宮祭場にて齋行。昨年まで太宰府天満宮の奉仕により奉奏されていた悠久舞を、本年は一年を掛けて温習した当大社巫女が、大祭を締め括るに相応しく見事に舞終えると、浄壇の祭場に集まった参列者達は感動の様子で、三日間に亘る秋季

大祭が盛大に幕を閉じた。

ここに秋季大祭に御奉仕頂いた皆様方に書面を以って厚く御礼申し上げます。



沖津宮・中津宮秋季大祭齋行

去る十月七・八日の両日に亘り、筑前大島に於いて沖津宮・中津宮の秋季大祭が厳粛且つ盛大に齋行された。

この大祭は旧暦の九月十五日に齋行されており、島民の多くが漁業従事者である大島は漁止めとなり、島全体を挙げての大祭となっている。また、神賑行事として島内の各地区・団体より

を奏上。島内を代表し、奉幣使として沖西豊幸氏が奉幣詞を奏上され、巫女が神楽「浦安の舞」を奉奏し、祭典は厳粛裡に齋行された。

午後一時三十分、恒例の「奉納演芸大会」が開催。趣向を凝らした、舞踊・ダンス・カラオケ・劇等が披露され、その賑やかな雰囲気の中、飛入り参加も続き、清々しい秋の境内は神人和楽の笑いど歓喜の声に包まれた。尚、大祭準備に連日御奉

サンマリノ共和国特命全権大使マンリオ・カデロ氏参拝



参拝された。

親日家として知られる同氏は日本語も堪能、神社神道に深い感銘を受け、『だから日本は世界から尊敬される』（小学館刊）を上梓され、本年六月にはサンマリノ共和国に神社を建立する等の活動をされている。

十月一〜三日の秋季大祭に、駐日大使一五三方国の代表である駐日外交団長、サンマリノ共和国特命全権大使マンリオ・カデロ氏が

一日のみあれ祭から始まり

り、二日祭、秋季大祭を締め括る高宮神奈備祭と三日間に亘り参列された同氏は、厳粛に齋行される祭典に感銘を受けられていた。また、祭典参列後には、宗像市の加東中学校で講演を行うなど精力的に活動された。今後益々のご活躍をお祈り申し上げます。

殿に於いて執り行われた。

翌八日、爽やかな秋晴れの下、沖津宮遙拝所にて沖津宮秋季大祭、大島の最高峰御嶽山に鎮座する御嶽神社にて秋祭、宮崎地区で厳島神社祭が其々齋行された。

午前十一時、地元島民を始め島外よりの篤信者多数参列のもと、中津宮秋季大祭を齋行。高向宮司が国家・皇室の弥栄を祈念する祝詞

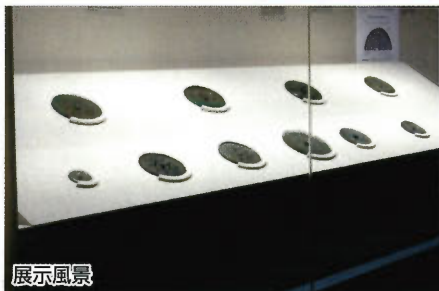
仕頂きました沖・中両宮奉賛会（会長 沖西敏明氏）、同翼賛会（会長 遠藤三保氏）、同敬神婦人部（部長 河辺恒子氏）の皆様には、心より御礼申し上げます。



東京・出光美術館 「宗像大社国宝展」が盛会裡に閉幕 〜延べ四七、二八二名が来館〜



9月22 日皇太子殿下下行啓



展示風景

宗像の悠久の歴史を広く紹介するため、古代から近世までの重要な神宝をはじめ、伊勢神宮や当大社と関わりある美術館、博物館の貴重な品々、一〇六件を展示した「宗像大社国宝展」(東京・出光美術館)が十月十三

日、盛会裡に閉幕した。八月十六日より始まった特別展には約二ヶ月で、四七、二八二名の予想を遥かに上回る方々が来館され、全国規模で宗像のことを深く理解して戴く機会となった。皇太子殿下には昨年七月四

日の御参拝に続き、九月二十二日には展覧会の行啓を賜ったことは、喜びに堪えない記念すべきこと

となった。八月二十三日には、パレスホテル東京にて福岡県等が沖ノ島と関連遺産群PRのため有識者一〇〇名を招いた交流会が開催され、九月三日には、出光美術館水曜講演会「古代沖ノ島祭祀について」(福嶋学芸員)に一六九名の参加を戴いた。各マスコミ報道については、新聞各社が紹介記事、展示作品の特集、沖ノ島に関わる対談などを掲載。雑誌出版社においては企画特集などが組まれた。また、テレビ番組での報道もあり、各メディアからの趣向を凝らした発信により、東京を中心とした地域の方々にも宗像の歴史や神道の奥深さを知って戴く機会ともなった。

神宮司庁をはじめ関係機関に衷心より御礼申し上げると共に、出光美術館の格別なるご配慮に厚く感謝申し上げます次第である。

第19回 出光興産株式会社 人事部教育課 中堅社員研修所感 過去最多、四十九名が参加

去る十月九〜十二日までの四日間、第十九回中堅社員研修の宗像大社研修を実施させて頂きました。本研修には、国内事業所の社員四十五名、ドーハ、タイ、ホーチミン、オーストラリアの駐在社員四名の総勢四十九名という過去最多人数での参加となりました。



神湊海岸での模練成

本研修は、出光興産の将来を担う中堅社員に「行動の土台となる生き方、考え方の基軸を形成してもらおう」とを目的に実施する中堅社員一次研修の一環として、宗像大社において日常生活と離れた神域に身を置き合宿生活を行う中で、「自己の感性を高めると共に改めて自分の生き方を見つめ直すこと」、「実

体験を通じて創業者である店主・出光佐三が多大な影響を受け、経営の原点とした日本の伝統文化を体感して店主の思い、ひいては、出光興産の原点を感じとること」の二つを目的に継続実施しているものです。

研修開始にあたり、宗像大社で研修をさせて頂くこ



とを御祭神様に奉告し、研修が実り多きものになることを祈願する研修開始奉告祭を仮本殿で執り行いました。その後、高向官司から「当大社での研修は、皆さんの今後の人生において二度と経験する

ことない貴重な体験となるはずです。店主が大切にされた宗像の地で、店主の生きた創業時からの時間軸を意識して出光のあり方の原点を感じ取ると共に、今後生きる多くの気づきを得て頂ければ幸いです。」と御講話を頂きました。

今年、昨年と同様、三泊四日の日程で、神職の方々のご指導の下、白衣、白袴の着付けから始まり、日々の朝拝、鎮魂の他、神社祭作法、第一・二宮・高宮参拝、海での禊錬成、大島渡島(中津宮、沖津宮遙拝所・御嶽神社参拝)、葦津権宮司講話(生きつづける神道と心とかたち)、神職の方々との討議・店主の好物であった

鶏すきを囲んでの懇親会を実施いたしました。

研修生からの「神道について祭作法から始まり、禊、鎮魂等今までの人生で触れることのなかった貴重な体験ができ、また、神道の考え方を体系立てて学ぶ中で店主の言葉、出光の社風などについて自分の考え方を深掘りできた。」「出光の根幹にある我々日本人が守り継承してきた『日本人のこころ』を神道への理解を通じて体感し学ぶことができました。」という感想が寄せられ、日々の業務から離れて神道を通じて自己、出光興産、日本を改めて見つめ直すという当初の目的は十分に達せられたように思います。

研修生に対して懇切丁寧なご指導をして頂いた宗像大社殿の皆様には心より御礼申し上げます。最後に、宗像大社の益々のご繁栄をお祈り申し上げ、研修の所感とさせていただきます。

七五三詣のご案内

宗像大神様に生を受けてから今日まで無事に成長出来たことを感謝し将来のご加護を祈願する人生儀礼です。

- ◆年齢 3歳の男児、5歳の男児、7歳の女児
- ◆期間 11月末迄
- ◆初穂料 1人 5,000円
- ◆授与品 御守、御幣、千歳飴 ほか

第44回 西日本菊花大会のご案内

毎年、11月1日から開催される菊花展。九州各県、山口の菊花愛好家から出品された様々な菊の花約3000鉢が境内に展示され、西日本一の規模を誇ります。

- ◆会期 平成26年 11月1日(土)～23日(日)
- ◆時間 終日
- ◆会場 宗像大社境内
- ◆拝観料 無料

高宮祭場清掃奉仕

研修終了、出発式

(続)

浜の奇物

294

いしただし



佐世保東山海軍墓地には

日清・日露から太平洋戦争に至る海軍の合葬碑、個人碑があり、碑の上に石造りの潜水艦や航空母艦を乗せたものもある。佐世保鎮守府潜水艦合同慰霊碑の上に

乗っている潜水艦は、パンフレットによれば「墓地内でひとときわ目をひくのは世界にも類のない「海大七型潜水艦」



二十分の一の石碑。大東亜戦争期間中に喪失した潜水艦三十二隻、将兵二、五九一名の霊を祀っています」とある。

海大七型は昭和十四年度の海軍充実計画で十隻が建造されたものでイー七六号から一八五号である。基準排水量一、六三〇t、水上速力二十三kt、艦首に六門の魚雷発射管を有している。この艦は全艦沈没ないし消息不明となっている。

わが国の潜水艦は木俣滋郎の「潜水艦入門」(光人社)では、大東亜戦争で喪失した日本潜水艦は事故を含めて、昭和十六年三隻、十七年十六隻、十八年二十七隻、十九年五十五隻、二十年五十六隻、合計一五七隻と

なっている。

パンフレットの内容に「海大七型」は海軍式大型潜水艦七型を略して海大七型とよばれる。海大型は昭和十八年のイー八五まで七つの型式が建造されその数は三十五隻にのぼった。それを

言っているであろう。この一面には潜水艦の潜望鏡やレリーフがあり、石造艦の左手には個人碑がある「大海の神に召されし丈夫の過ぎし月日は早や五十年伊号三七〇潜水艦、故吉村重親、昭和二十年三月二十四日硫黄島にて戦死 遺族吉村ヒサ子」とあった。

光人社の「写真太平洋戦争」(第十巻)を見ていたら、イ三七〇の出



しかし飛龍

撃の写真があった。イ三七〇と白いペンキで艦号下に日ノ丸、艦橋で手をふる兵士、左手の回天上天にも四人の兵士が手を振っている。イ三七〇は回天特別攻撃隊(千早隊)の一艦として一九四五年二月二十一日硫黄島作戦に出撃している。米側資料では四十五年二月二十六日硫黄島近海において、護衛駆逐艦フィネガンの攻撃をうけて沈没とある。墓碑は三月となっている。

も米艦載機の猛攻を受け大損害、味方駆逐艦によって自沈。司令長官山口多聞、艦長加来止男大佐は艦と共に沈んだ。私が年少の頃、戦争画のハガキに「提督の最後」があった。暗褐色の色調、砲身が折れ、後方に飛行帽をかぶった兵士たち、中央に山口多聞長官、幕僚、艦幹部達が寄って、樽の栓を抜いて最後の別れをしている。(この絵ハガキの内容を知ったのは後のことである)

航空母艦雲龍の碑の上にも石造の空母が乗っている(後述)海の防人之碑の後方に加賀、飛龍の碑がある。昭和十七年六月のミッドウェー海戦で、空母四隻を失って惨敗を喫した海戦である。赤城、加賀、蒼龍がやられ、飛龍は米空母

碑には「在天の山口司令官 加来艦長はじめたくさんの戦友たちよあの日のことどもともに語りたいたいその後のことも聞いてほしいだが今はそれもかなわずとこしなえにこの聖地のみ靈安らかに眠れかしとただ祈るのみ」と刻されている。

飛龍は一七、三〇〇t、全長二二七・四m、速力三十四・三kt、搭載機数七十三機。

第六三九回

宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日メット



北九州市 戸畑区 田中ハツセ

一瞬の光と音の三時間秋田の花火に夏も終りぬ

緊張感と昂揚感が初句・二句に籠る。結句は作者の身に引きつけ「わが夏終わるに」。

北九州市 八幡西区 豊田 光子

墨壺あり金床ありて木挽なる亡父の思考はいまも離れず

道具の名が効いている。四・五句(父の思い出われには身近)などとしても良い。

宗像市 日の里 軍神荒戸ケイコ

汝の服は身を包むのは吾の前にパリのシャネルのオートクチュール

毎月ブランド名の入った似た歌を出されているが、発想の違う歌に挑戦して

うきは市 浮羽町 向 則正

宇佐宮に二札四拍手清々し猛暑日の午後息子と祈れり

宇佐宮の参拝の作法を詠み込み興味深い一首。二句(〜)し、結句(子と語で来て)。

宗像市 宮田 山本 静子

コップ一杯のみて出で来し芝の上もぐら君かな黒土上ぐる

楽しい気分の歌、飲んだものが水か酒かで背景の時間や様子が変わるので分かるように。

宗像市 日の里 秋吉 嘉範

宇宙へ一直線に延びてゆく真綿色した飛行機雲は

字足らずの初句を(宇宙まで)と。発想も(真綿色)も良いのでリズムに気を配って。

宗像市 多禮 早川 祥三

百越えて残りし祖父の骨寡黙頑固一徹憲兵のまま

祖父の人柄が良く分かる。(百を超え頑固一徹憲兵のままで逝きたり寡黙なりし祖父)。

福津市 若木台 山崎 公俊

ゆつたりと発ちしフェリーが沖さして速度上げたり舳が上がる

フェリーが速度を上げると舳が上がると、発見の歌。三句は助詞をいれ(沖をさし)に。

宗像市 田久 巻 桔梗

たかき石のはやしのおひの公園の石に彫られたる「故郷」の歌詞の多用し結句の歌詞に収束する構成。石の重なりが気になるので(公園の石柱林立するおひの碑に彫る〜)などとしては。

北九州市 門司区 北野カズミ

とげや毒自身を護る植物の「脳はどこよ」と問ひつつに見る

意外性のある展開が魅力。初句には助詞を入れ(〜)を、結句(問ひながら見る)。

福津市 星ヶ丘 佐々木和彦

玄海とちがふ七尾の朝の湾加賀屋の窓より見渡してをり

良い旅をした作者。七尾の海と玄界の風景の違いの描写が欲しい。加賀屋の歌も別に詠んでは。

宗像市 池田 森 龍子

犬小屋を捨て切らずにゐて月の夜は躡るごとく黒き影見ゆ

犬小屋の影に愛犬の姿を見る作者だろう。二句は(捨てきれずゐて)結句(その影を見る)とした。

宗像市 日の里 大和美由紀

サークルの帰りの挨拶ごきげんよう朝のドラマの言葉を真似る

美輪明宏の声が聞こえてきそう。「ごきげんよう」を括弧に入れ、結句は(〜)を借りて(〜)としては。

宗像市 青葉台 山下 奈美

親姿横目に見つつ頭下げ子らの拍手ふたえに響き

大人を真似ながらお参りする幼児の姿が可愛い。初句は(両親を)と。結句は(重なり響く)に。

◆ 選者詠

さびしさは指にはじまる鱗ごとこのしろの皮ぞつくりと剥ぎ

人なれば定年迎ふころほひの洋梨むけば滂沱の果汁

第六二二回

俳句作品集

宗像市 武丸 白土 凌一

名月やすすきの門よりだんごかな

宗像市 日の里 石松 弘次

塀に咲く朝顔清し塀に挿す

宗像市 多禮 早川 祥三

こくりこくりと添い寝する団扇風

11月祭事暦

- 1日 月次祭 午前10時〜 高宮祭、第二宮・第三宮祭 宗像護国神社 月命日祭
- 午前11時〜 総社祭、浦安舞奉奏
- 3日 明治祭 午前10時〜
- 15日 月次祭 併 七五三祭 午前10時〜 総社祭・高宮祭、第二宮・第三宮祭
- 23日 新嘗祭 午前11時〜 豊栄舞奉奏

編集後記

当大社周辺では稲刈りが進む実りの秋。毎年この時期、境内は菊花と、晴れ着に身を包んだ七五三詣の子供たちで彩られます。祈願を終えようと、菊花を背景に家族写真を撮る姿が目にとまります。親が撮影した写真、映像を、子供たちは何年、何十年後かに目にし、その時の様々な記憶を呼び起こすのでしよう。現在、境内で開催中の菊花展は「昭和の大造営」の奉祝行事として始まり、今年で四十四回を数えます。一体どれだけの人々の記憶に刻まれてきたのか。今年も多くの皆様の思い出のページに刻んで頂ければ。菊花の見頃は十一月前半です。(鈴)

発行所 宗像大社社務所・宗像会

住所 千八一一三五〇五

福岡県宗像市田島二二三一

電話 (〇九四〇)六二一一三二一(代)

編集人 大塚宗延・鈴木祥裕

制作・印刷 ゼネラルアサヒ

毎月1日発行 定価1年送料共 1,000円